



小学校高学年生から中学生の子どもをもつ母親の悩みとそれに対する被援助志向性について：教育相談における母親への臨床的介入のあり方の検討

小松, 陽香
齊藤, 誠一

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 20:6-11

(Issue Date)

2021-02-28

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013012>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013012>



小学校高学年生から中学生の子どもをもつ母親の悩みと それに対する被援助志向性について —教育相談における母親への臨床的介入のあり方の検討—

The problems of mothers with upper elementary to junior high school children and
help-seeking orientation for resolving them

小松 陽香* 齊藤 誠一**

要約:本研究では、思春期年齢にあたる小学校高学年生から中学生の子どもをもつ母親がどのような悩みをもち、それについてどのサポート源に相談を求めようとしているかを明らかにし、スクールカウンセリングなど教育相談においてどのような介入が求められているかを検討した。小学校高学年生から中学生の思春期の子どもを持つ母親に質問紙調査を行い、267名(平均年齢44.46歳)を分析対象とした調査結果から、母親には子どもの学習面・進路、子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機、自分自身に関する悩みが多いこと、これらについて相談したいとする援助要請が夫に高く求められていること、多様な悩みに対して夫、実母、友人から有効な解決が得られなかった場合などに援助要請できる教育相談の環境が用意される必要があることが示唆された。

キーワード: 母親, 悩み, 被援助志向性, 教育相談

問題と目的

教育相談の対象には、児童・生徒、教師のほか、保護者も含まれているが、介入の中心は児童・生徒に置かれることが多い。確かに学校内で生じる友人とのトラブル、教室内での不適応行動、教師との関係などは児童・生徒に直接関わることにより解決できる問題も少なくない。しかしながら、たとえば不登校の場合、当該の児童・生徒に接触を持てることもあるが、長期間にわたって接触が持てないことも多い。そうした場合、家庭訪問であっても、呼び出し面接であっても、保護者との面接により相談を進めていくことになる。また、保護者自身が子育てのあり方に悩みを持ち、担任教師や養護教諭、あるいはスクールカウンセラーの元を来談することもある。こうした点からも教育相談の対象としての保護者の位置づけを再確認するとともに、保護者自身が有する問題を明らかにする必要がある。本研究では、保護者でもより子どもとの関係が深く、子育てに関わる悩みを生じることが多い母親を取り上げることとする。

近年、子育て支援に対する関心が高まっているが、そのほとんどは乳幼児を育てる母親への支援に焦点が当てられてきた。しかしながら、子育ては乳幼児期に留まらず、子どもが親から独立するまで続くものである。たとえば、内閣府(2010)の子ども・子育てビジョンでは、社会全体で子育てを支えることを主眼に総合的な子育て支援が提案されており、ライフサイクル全体を通して社会的に支えるという考え方の元で、「困っている声に応じる」という姿勢が示されている。こうした中であって、乳幼児期以降の子育て支援が重要な時期として、思春期の子どもをもつ時期が挙げられている(大久保・市来・堂上・井村・谷口・谷口, 2012;

李, 2013)。この理由として、①思春期の子どもは心身の著しい発達上の変容とそれに伴う混乱があり、親に反抗的な態度を取るなど子どもの側の変化により子どもへの対応に困難が生じやすく、子育てストレスも大きいこと、②同時に、この時期は保護者自身が中年期にさしかかり、身体的な変化、家族サイクルの変化、職業上の地位や役割の変化などの中年期危機が体験され、健康面、家族面、職業面で悩みも増え、ストレスフルな状況となること(岡本, 2002)が挙げられる。とりわけ、この時期の女性は、更年期症状をはじめとした身体の変化、子どもの自立、夫との関係、親の介護などによるストレスが大きいこと(長津・演田, 1999)、子どもの思春期開始に伴い、親の側の人生再評価の感情が高まり、中年期の心理的危機も重なり、自尊心や生活満足感が低まること(木下, 1999)が明らかにされている。このように思春期の子どもを持つ母親は、子育てだけでなく、家族や自分自身に関する悩みやストレスも抱えやすい発達段階にあるといえる。つぎに、こうした母親へ支援するサポート源について検討すると、もっとも大きな存在は夫であると言われている。Cantor(1979)は成人期以降の女性が夫からサポートを受けることを好むこと、田中(2005)は夫からのサポートを期待していることが妻のストレス反応の低減に有効であることを明らかにしている。また、末盛(1999)は夫の情緒的サポートが家事支援以上に妻の満足度を高めるとしており、情緒的サポートが妻の精神的健康にとって重要であることが示唆されている。

ただし、夫からのサポートが得られなかったとき、女性は友人や家族などにサポート資源を広げることが指摘してされている(川浦・池田・伊藤・本田, 1996)。また、サポート源に子育て経験がある存在として、多くが実母を選んでいること(山岡,

* 枚方市職員

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

2011), 中年期女性は家族からだけでなく, 友人からも現在の悩みや将来について心理的サポートを受けていること(豊田・村野・鈴木, 2013)が明らかにされている。これらについて, 川浦他(1996)によると, 男性は結婚によって妻子にサポートシステムが集中するが, 女性は男性ほど配偶者に集中せず, 親との関係が結婚後も維持され, 子どもを通じた友人が新規に加わることによって, 多様な対象を含んだ柔軟性のあるサポートシステムを形成していると指摘している。このことから, 教育相談における母親への支援は母親の有する多様なサポート源のひとつであると位置づけることも必要であるといえる。

他方, 相談に関わるもうひとつの要素として相談を求める側の動機づけがあり, たとえば制度として相談室や相談体制を整備されたとしても相談したいという来談意欲がなければ相談は成立しない。これに関連する概念の一つとして近年注目されているのが, 何らかの悩みを抱えた人が他者に援助を求めるかどうかの認知的枠組(水野・石隈, 1999)とされている被援助志向性である。笠原(2000)は育児ストレスの高い母親ほど, 援助要請に対する意識は高いが, 実際に行動に移す割合は低く, 専門的な援助が必要な人ほど援助を要請しない, あるいはできないことを明らかにしている。さらに, 田村・石隈(2002)はもし危機に直面しても, 被援助欲求が低かったり, 援助を受けることに対する心理的抵抗があったりする人は, 援助をうまく求められず, 援助資源を活用できなくなることを指摘している。このように, 母親が援助資源を適切に活用するためには被援助志向性が重要であり, 母親自身の被援助志向性の特徴を把握し, それを高める方略を検討することも母親支援において必要であると考えられる。

以上の観点に立ち, 本研究では思春期年齢にあたる小学校高学年生から中学生の子どもをもつ母親がどのような悩みをもち, それについてどのサポート源に援助(相談)を求めようとしているかを明らかにし, 教育相談やスクールカウンセリングなどに従事する専門職にどのような介入が求められているかを検討することを目的とする。

方 法

1. 調査時期

2014年12月に実施した。

2. 調査対象者

兵庫県内のA小学校およびB中学校に依頼し, 担任教師等から小学5年生から中学3年生の児童・生徒に調査依頼状, 調査用紙などが封入されている封筒を配布し, 母親への手渡しを求めた。母親には, 同封された依頼状により返信用封筒による郵送返送を求めた。前述の封筒は640名に配布され, 301名から郵送による回答が得られた(全体の回収率は47.0%であった)。欠損値が多かった25名を除外し, 276名を分析対象とした(ただし, 欠損値がある場合は当該項目の分析のみから省いた)。全体の平均年齢は44.46歳(SD=3.89, 33~55歳)であった。

なお, 調査用紙には, 調査協力を拒否できる権利, 回答の途中で中止できる権利, 拒否や中止をしても不利益は発生しないことを説明し, 調査用紙への回答をもって同意を得たものとした。

3. 調査内容

(1)属性 年齢, 子どもの人数及びそれぞれの子どもの年齢と性別, 同居家族, 就労状況。

(2)悩みとその大きさ 母親の悩みとその大きさを捉えるために, 大久保ら(2012)の思春期の子どもを持つ親が必要としている支援および子育てにおいて気がかりなことについて挙げられている項目を参考に, 子育てに関わる悩み6項目, 家族に関わる悩み1項目, 自分自身に関わる悩み1項目の計8項目について, それぞれの悩みの大きさを「1. 全く悩んでいない」~「5. とても悩んでいる」の5件法で回答を求めた。

(3)被援助志向性 母親のサポート源として, 夫, 実母, 友人, 専門家を取り上げ, それぞれに対する援助欲求の大きさを捉えるために, (2)の8つの悩みについて, 実際にその悩みがあった場合を思い浮かべて, それぞれを各サポート源にどれくらい相談したいと思うかどうかを尋ねた。回答は, 「1. 相談したくない」~「5. 相談したい」の5件法で求めた。

(4)周囲のサポート源への相談の程度と問題解決の有無 母親の主なサポート源と考えられる夫, 実母, 友人の3つのサポート源について, 困ったときに相談する頻度を「1. ほとんどする」~「4. 相談したことがない」の4件法で, 相談後の問題解決の有無を「1. 解決した」~「3. 解決しなかった」の3件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 調査協力者の基本属性 (Table1)

調査協力者の約82%が40歳代で, 約64%に子どもが2人おり, 約92%が核家族で, 約61%が何かの形で就労していた。

Table 1 調査協力対象者の基本属性(人数(%))

年 齢	33~39歳	22 (8.0)
	40~49歳	227 (82.2)
	50~55歳	27 (9.8)
子 の 人 数	1人	44 (15.9)
	2人	176 (63.8)
	3人	52 (18.8)
	4人	4 (1.4)
長 子 年 齢	10~12歳	40 (14.5)
	13~15歳	157 (56.9)
	16~18歳	47 (17.0)
	18~25歳	31 (11.2)
	不明	1 (0.4)
末 子 年 齢	1~3歳	9 (3.3)
	4~6歳	19 (6.9)
	7~9歳	39 (14.1)
	10~12歳	102 (37.0)
	13~15歳	106 (38.4)
不明	1 (0.4)	
居 住 形 態	夫同居	253 (91.7)
	実母同居	9 (3.3)
	実父同居	7 (2.5)
	義母同居	6 (2.2)
	その他同居	1 (0.4)
就 労 形 態	専業主婦	86 (31.2)
	アルバイト・パート勤務	122 (44.2)
	フルタイム勤務	48 (17.4)
	その他	20 (7.2)

Table 2 悩みの大きさの度数分布

	全く 悩んでいない	あまり 悩んでいない	どちらとも いえない	少し 悩んでいる	とても 悩んでいる
子どもの からだの健康	38 (13.77%)	121 (43.84%)	38 (13.77%)	70 (25.36%)	9 (3.26%)
子どもの こころの健康	22 (7.97%)	93 (33.70%)	53 (19.20%)	91 (32.97%)	17 (6.16%)
子どもの 学習面・進路	5 (1.81%)	31 (11.23%)	38 (13.77%)	132 (47.83%)	70 (25.36%)
子どもの 交友関係	33 (11.96%)	109 (39.49%)	62 (22.46%)	64 (23.19%)	8 (2.90%)
子どものパソコン・ 携帯電話・ゲーム機	14 (5.07%)	70 (25.36%)	46 (16.67%)	96 (34.78%)	50 (18.12%)
子どもの 生活・行動	18 (6.52%)	88 (31.88%)	51 (18.48%)	90 (32.61%)	29 (10.51%)
家族のこと	17 (6.16%)	102 (36.96%)	53 (19.20%)	79 (28.62%)	25 (9.06%)
自分自身のこと	11 (3.99%)	65 (23.55%)	63 (22.83%)	120 (43.48%)	17 (6.16%)

2. 悩みとその大きさについて

母親の悩みとその大きさについて、それぞれ現在の悩みごとの度数分布を Table2 に示す。「少し悩んでいる」、「とても悩んでいる」の回答数を合計して見た場合、最も多くの母親が悩んでいることは、「子どもの学習面・進路」(約 73%) であり、次いで「子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機」(約 53%)、「自分自身のこと」(約 50%) であった。このことから、半数以上の母親が子どもに関わる学習面や進路、パソコン・携帯電話・ゲーム機のことだけでなく、自分自身のことについても悩みを持っていることが明らかになった。

学習面の悩みについては、本調査と同様に思春期の親に気がかりなことについて尋ねた大久保他 (2012) の結果と一致していた。また、村上 (2011) は、小学校高学年に入ると学習内容が難しくなることで、子どもが親の指導がなくとも勉強をするようになることを挙げるとともに、小学校中学年と比較して「子どもと成績や勉強について」や「子どもと将来や進路について」話をする母親の割合が増え、母親の子どもの進学に向けての関心が高くなることを示している。さらに、中学校に入ると子どもの学習を母親が見ることが減少し、「家庭学習の習慣」や「学校の宿題や予習・復習」の悩みが大きくなり、「今は勉強することが一番大切だ」、「出来るだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」と思う母親が増加することを明らかにしており、本調査においても母親の進学に向けての関心が高く、その結果として悩みが大きくなっていることが推測された。

他方、子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機については、河村 (2007) の指摘と同様に、学習面についての意識が高い母親が多いため、学習の妨げとなるパソコン・携帯電話・ゲーム機についての悩みを持つ母親が多くなったと考えられる。

さらに、自分自身のことについては、中年期に入ることにより、身体的衰え、社会的役割の変化、自己の有限性の自覚などに直面し、自分の生き方やあり方そのものについて内省と問い直しを迫られること (岡本, 1985) から、悩みが多くなるものと考えられる。この点からいけば、本調査の分析対象者の 80%以上が 40 歳代であることから、こうした発達的变化を顕著に経験し、自分自身について内省する機会が多く、悩みも多くなっていると推測される。

3. 各悩みと被援助志向性

2 で取り上げた各悩みに対して援助を要請する対象について検討する。検討にあたっては、全体的な傾向を把握するために、「相談したい」と「どちらかといえば相談したい」をあわせて「援助を求めたい」とし、「相談したくない」と「どちらかといえば相談したくない」をあわせて「援助を求めたくない」として分析することとする。

なお、以下の(1)から(8)の結果について、各対象間の反応を独立と

みなして χ^2 検定を行ったところ、いずれも 1%水準で有意であり (χ^2 値は、順に 155.56, 162.74, 292.17, 208.98, 286.97, 213.98, 109.32, 90.72)、残差分析の結果は各 Table に記載したが、前述の理由から「相談した」と「相談したくない」のみの有意な残差について言及し、他のセル間の詳細な比較は行わないこととする。

(1) 子どものからだの健康に関する相談 (Table3)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが夫 (約 86%)、専門家 (約 64%)、実母 (約 61%) で、夫への援助要請が最も大きく、専門家には相談したいとはするものの、まずはより身近な夫に相談したいとしているものと考えられる。また、「相談したい」で夫 (約 67%) の割合が、「相談したくない」で友人 (約 7%) の割合が有意に大きかった。

Table 3 子どものからだの健康に関する相談(被援助志向性)

	相談した くない	どちらか といえば 相談した くない	どちらと もいえな い	どちらか といえば 相談した い	相談した い
夫	6 2.23%	6 2.23%	26 9.67%	50 18.59%	181 67.29%+
実母	15 6.28%	22 9.21%	57 23.85%	60 25.10%	85 35.56%
友人	20 7.25%+	33 11.96%+	97 35.14%+	71 25.72%	55 19.93%
専門家	8 2.90%	10 3.62%	80 28.99%+	61 22.10%	117 42.39%

注) 残差分析において 5%水準で有意に観測度数が大きかったセルに+、小さかったセルに-を付す。Table 4 ~12も同様。

(2) 子どものこころの健康に関する相談 (Table4)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが夫 (約 85%)、専門家 (約 60%)、実母 (約 54%) であり、夫への援助要請が最も大きかった。また、「相談したい」で夫 (約 69%) の割合が有

Table 4 子どものこころの健康に関する相談(被援助志向性)

	相談した くない	どちらか といえば 相談した くない	どちらと もいえな い	どちらか といえば 相談した い	相談した い
夫	7 2.59%	7 2.59%	27 10.00%	44 16.30%	185 68.52%+
実母	19 7.95%	25 10.46%	66 27.62%	57 23.85%	72 30.13%
友人	20 7.25%	32 11.59%+	92 33.33%+	77 27.90%+	55 19.93%
専門家	12 4.35%	17 6.16%	82 29.71%+	67 24.28%	98 35.51%

意に大きかった。いずれも、前項と同様の傾向を示し、こどものからだやこころの健康については、まず夫に相談し、専門的対応が望める専門家、これまでの子育て経験からの援助を求めて実母に相談するものと推測できる。

(3) 子どもの学習面・進路に関する相談 (Table5)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが夫(約87%)、専門家(約66%)で、先の2つの悩みと同様に夫に「相談したい」とする割合が最も大きかった。また、「相談したい」で夫(約72%)、専門家(約42%)の割合が、「相談したくない」で友人(約7%)の割合が有意に大きく、子どもの具体的な状況の情報や専門的知識を有している専門家に対する援助要請は実母や友人よりも大きかった。

Table 5 子どもの学習面・進路に関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	5 1.85% -	4 1.48% -	27 10.00% -	40 14.81% -	194 71.85% +
実母	22 9.21% +	34 14.23% +	99 41.42% +	39 16.32% +	45 18.83% -
友人	36 13.04% +	33 11.96% +	106 38.41% +	65 23.55% +	36 13.04% -
専門家	18 6.52% +	6 2.17% -	70 25.36% +	67 24.28% -	115 41.67% +

(4) 子どもの交友関係に関する相談 (Table6)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが、夫(約73%)、友人(約61%)で、夫とともに、子どもの交友関係をより知っていると思われる友人への援助要請が大きかったものと思われ、実母や専門家への援助要請は少なかった。また、「相談したい」で夫(約54%)の割合が、「相談したくない」で実母(約14%)の割合が有意に大きかった。

Table 6 子どもの交友関係に関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	7 2.59% -	8 2.96% -	59 21.85% -	51 18.89% -	145 53.70% +
実母	34 14.23% +	34 14.23% +	103 43.10% +	24 10.04% -	44 18.41% -
友人	17 6.16% +	10 3.62% -	81 29.35% -	98 35.51% +	70 25.36% +
専門家	30 10.87% +	21 7.61% +	127 46.01% +	53 19.20% +	45 16.30% -

(5) 子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機に関する相談 (Table7)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが、夫(約80%)、友人(約65%)で、前項と同様に夫への援助要請とともに、同じ

Table 7 子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機に関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	5 1.85% -	6 2.22% -	43 15.93% -	56 20.74% +	160 59.26% +
実母	37 15.48% +	35 14.64% +	118 49.37% +	23 9.62% -	26 10.88% -
友人	14 5.07% -	10 3.62% -	72 26.09% -	96 34.78% +	84 30.43% +
専門家	27 9.78% +	20 7.25% +	131 47.46% +	37 13.41% -	61 22.10% -

ような悩みを共有していると思われる友人への援助要請が大きく、実母や専門家への援助要請は少なかった。また、「相談したい」で夫(約59%)の割合が、「相談したくない」で実母(約15%)の割合が有意に大きかった。

(6) 子どもの生活・行動に関する相談 (Table8)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが夫(約81%)、友人(約56%)で、夫への援助要請が最も大きかったが、専門家(約45%)や実母(約39%)に対しても多少とも援助を求めており、悩みの内容や軽重などによって援助要請を求める対象が多様であることが推測できる。また、「相談したい」で夫(約65%)の割合が、「相談したくない」で実母(約13%)の割合が有意に大きかった。

Table 8 子どもの生活・行動に関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	6 2.22% -	5 1.85% -	39 14.44% -	45 16.67% -	175 64.81% +
実母	30 12.55% +	31 12.97% +	85 35.56% +	42 17.57% -	51 21.34% -
友人	14 5.07% +	18 6.52% +	88 31.88% +	96 34.78% +	60 21.74% -
専門家	26 9.42% +	16 5.80% +	110 39.86% +	57 20.65% +	67 24.28% -

(7) 家族のことに関する相談 (Table9)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが、夫(約57%)で、夫への援助要請が最も大きく、実母(約41%)、友人(約40%)と続き、専門家への援助要請は約23%にとどまっており、他の悩みに比較しても専門家への援助要請は少なかった。このことは家族の構成員である夫にも相談しにくく、家族外の人に対しても家族の問題を流出したくない、あるいは個別の家族の問題が理解されないとしていることが推測できる。他方、より専門的な対応が期待できる専門家に対しても援助要請が少ないことも特徴であった。また、「相談したい」のみの割合では夫(約43%)が有意に大きかった。

Table 9 家族のことに関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	21 7.78% -	18 6.67% -	77 28.52% -	38 14.07% +	116 42.96% +
実母	27 11.30% +	30 12.55% +	84 35.15% +	45 18.83% +	53 22.18% +
友人	39 14.13% +	36 13.04% +	90 32.61% +	60 21.74% +	51 18.48% -
専門家	51 18.48% -	28 10.14% +	133 48.19% +	33 11.96% -	31 11.23% -

(8) 自分自身のことに関する相談 (Table10)

過半数の者が「援助を求めたい」対象としたのが、夫(約69%)、友人(約54%)、実母(約50%)であったが、約41%の者が専門家へも援助要請を求めていた。他者には知られたくないことも含まれるため、家族のことに関する相談と同様の傾向は見られた。また、「相談したい」のみの割合では夫(約47%)が有意に大きかった。

Table 10 自分自身のことに関する相談(被援助志向性)

	相談したくない	どちらかといえば相談したくない	どちらともいえない	どちらかといえば相談したい	相談したい
夫	18 6.67%	15 5.56%	52 19.26% -	57 21.11%	128 47.41% +
実母	28 11.72%	25 10.46%	66 27.62%	63 26.36%	57 23.85% -
友人	22 7.97%	20 7.25%	86 31.16%	93 33.70% +	55 19.93% -
専門家	31 11.23%	20 7.25%	110 39.86% +	45 16.30% -	70 25.36%

4. 周囲のサポート源への相談の程度と問題解決の有無

3で取り上げたサポート源のうち、全体として利用していない者の方が多いと推測できる専門家を除く、夫、実母、友人に対する相談の程度を Table11, 問題解決の有無を Table12 に示す。

いずれも各対象間の反応を独立とみなして χ^2 検定を行ったところ、相談頻度では、夫に対しては「ほとんどする」の割合が有意に大きく、実母、友人に対しては「時々する」が多く、実際のサポート源として夫を利用していることが示された ($\chi^2(6)=127.02, p<.01$)。また、相談後の問題解決については、友人によって「解決した」割合(約 57%)が有意に大きく、夫と実母ではそれぞれで約 40%に程度の者が「解決した」としている ($\chi^2(4)=56.33, p<.01$)。したがって、夫には「ほとんど相談する」が、相談後の解決が得られるのは友人に相談した場合が多かったといえる。

Table 11 各サポート源への実際の相談頻度(人数(%))

	相談したことがない	あまり相談しない	時々する	ほとんどする
夫	3 (1.1)	34 (12.5) -	88 (32.5) -	146 (53.9) +
実母	10 (4.1) +	80 (32.8) +	116 (47.5)	38 (15.6) -
友人	4 (1.4)	60 (21.7)	158 (57.2) -	54 (19.6) -

Table 12 各サポート源への相談後の解決の有無(人数(%))

	解決しなかった	どちらともいえない	解決した
夫	16 (6.0)	144 (53.7) +	108 (40.3) -
実母	9 (3.8)	116 (57.3) +	91 (38.9) -
友人	4 (1.4) -	60 (21.7) -	158 (57.2) +

全体的考察

母親の悩みとしては、子どもの学習面・進路について、子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機について、自分自身のことについての順に多く、学習面に関する悩みは小学校高学年から中学生にかけての子どもの進路選択、母親自身の中年期危機に関係しているものと考えられる。それらの悩みに関して、母親の被援助志向性が最も高い対象は夫であり、子育てに関わる悩み全般では子どもの交友関係についての悩み以外は専ら夫に相談したいと回答していた。このことは、成人期以降の人々は一般的に配偶者からのサポートを好むという Cantor (1979) の知見と一致するといえる。

他方、被援助志向性が夫の次に高い対象を見ると、子どものか

らだの健康、子どものこころの健康、子どもの学習面・進路については実母であり、子どもの交友関係、子どものパソコン・携帯電話・ゲーム機、子どもの生活・行動、自分自身については友人であった。子どものからだやこころの健康および学習・進路面では、実母が自らの子育て経験により情報提供が可能であり、子どもの交友関係、パソコン・携帯電話・ゲーム機、子どもの生活については同じ年代の子どもを持っていると思われる友人から共感やアドバイスを得やすいものと考えられる。こうしたことは、母親は悩みによって相談する対象を柔軟に選んでいるといえ、川浦他(1996)の既婚者女性はサポートを求める対象を男性ほど配偶者や子どもに集中させず、親や友人など多様な対象を含んだ柔軟性のあるサポートシステムを形成しているという指摘と一致していた。

このように、一定程度は夫、実母、友人に相談しているが、問題を解決できたとする割合は夫で約 40%、友人で約 57%、実母で約 38%にとどまっており、夫、実母、友人にいろいろな悩みを相談するものの必ずしも問題が解決できているわけではないといえる。たとえば、不登校が始まった初期の段階で、母親がしばらく休ませて心理的に安定させようと考えても、夫や実母が強制登校を促すことも多く、相談はできてもポジティブな解決をはかるだけの有効なアドバイスでなかったり、むしろ自分が求めているものは異なるネガティブなサポートもあったりするかもしれない。他方、相談しても解決することが多くなくても、事あるごとに相談するということは、相談することに問題解決という道具的サポート機能だけではなく、相談することによる心理的安定が得られるという情緒的サポート機能もあることを示唆しているといえよう。こうしたことから、母親が夫、実母、友人では十分な道具的サポートも情緒的サポートも得にくい悩みに対して、スクールカウンセラーなどの教育相談的支援が求められているといえよう。

以上のことから、教育相談として高学年から中学生の子どもをもつ母親への支援を考える場合、留意すべき点として以下のことを挙げるができる。

①母親は子どもに関わる種々の悩みを有し、それに対して夫、実母、友人に援助要請することが多く、気軽に相談できるという点でメリットは大きいですが、必ずしも十分な援助を受けられなかった場合や問題解決に至らなかった場合のために、次に援助要請ができる環境として教育相談を用意しておく必要がある。

②専門家に比較的高い援助要請がある子どものからだの健康、子どものこころの健康、子どもの学習面・進路については、教育相談がこうした相談を引き受けている情報を提供するなどして来談へバリアをなくしたり、教育相談に関する保護者向けの案内や通信などを継続的に配布し、解決のための情報を提供したりすることが必要である。

③家族のことに関する悩みについて専門家へ援助要請する割合が最も低いことは、スクールカウンセラーなどに相談することにより子育てや家族関係に対してなされるかもしれない低い評価に対する懸念が原因のひとつと推測できるが、虐待やDVが増加している現状にあっては、教育相談が家族に直接介入しなくても、自治体の福祉関係部署や児童相談所など関係機関への紹介などができるという紹介機能の周知も必要である。

④母親自身に関する悩みは、子どもとは関係がないかもしれないが、母親の年齢層特有の中年期危機に関わる場合もあるので、スクールカウンセラーなどによる専門的な対応が望まれる。こうした問題は子どもの問題を相談する形で提起されることも多いので、悩みの本質的理解と適切な介入のあり方の判断、悩み以外の身体的、精神的訴えに対しては心療内科医などへの紹介も必要である。

引用文献

- Cantor, M.H. (1979). Neighbors and friends : An overlooked resources in the informal support system *Research on Aging, 1*, 434-463.
- 笠原 正広 (2000). 保育者による育児支援—子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から— *中村学園研究紀要, 32*, 51-58.
- 河村 洋子 (2007). 子育て環境 ベネッセ教育総合研究所 第3回子育て生活基本調査 (小中版) (pp.99-109) ベネッセ教育総合研究所
- 川浦 康至・池田 政子・伊藤 裕子・本田 時雄 (1996). 既婚者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート—女性を中心に— *心理学研究, 67*, 333-339.
- 木下 揚里子 (1999). 思春期の子どもの反抗・親離れに伴う母親の心理的变化：尺度作成に関する研究 *お茶の水女子大学人文科学紀要, 52*, 339-355.
- 水野 治久・石隈 利紀 (1999). 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 *教育心理学研究, 47*, 530-539.
- 村上 達也 (2011). 子どもの学年段階別による母親の子育て意識とその実態 ベネッセ教育総合研究所 第4回子育て生活基本調査 (109-119) ベネッセ教育総合研究所
- 長津美代子・濱田由紀子 (1999). 中年期における女性の夫婦間ディストレス *日本家政学会誌, 50*, 793-805.
- 内閣府 (2010). 平成22年版子ども・子育て白書 佐伯印刷
- 岡本 祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 *教育心理学研究, 33*, 295-306.
- 岡本 祐子 (2002). 中年期女性における自己発見—アイデンティティの深化— *教育と医学, 50*, 309-314.
- 大久保 千恵・市来 百合子・堂上 禎子・井村 健・谷口 尚之・谷口 義昭 (2012). 思春期の親が必要とする支援の探索的研究 *奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, 21*, 189-192.
- 李 敏子 (2013). 思春期の子どもをもつ親への支援 *椋山臨床心理研究, 13*, 3-6.
- 末盛 慶 (1999). 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感—妻の性別役割意識による交互作用— *家族社会研究, 11*, 71-82.
- 田村 修一・石隈 利紀 (2002). 中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連 *教育心理学研究, 50*, 291-300.
- 田中 祐子 (2005). 中年期女性のストレスとソーシャルサポート関係学研究, *32*, 77-87.
- 豊田 賀子・村野 真希・鈴木 淳子 (2013). 中年期における友人

関係とソーシャルサポートの質的検討 東京福祉大学・大学院紀要, *3*, 29-37.

山岡 テイ (2011). 子育ての気がかり・情報環境 ベネッセ教育総合研究所 第4回子育て生活基本調査 (pp.15-31) ベネッセ教育総合研究所

付 記

- 1) 本論文は、第一著者が2015年度に神戸大学大学院人間発達環境学研究科に提出した修士論文のデータの一部を再分析したものである。
- 2) 本研究の一部は、日本心理臨床学会第34回秋季大会において発表した。